

マレーシア語のモダリティの概要*

野元 裕樹

1. はじめに

本稿では、マレーシア語のモダリティ要素について、調査項目（以下では「アンケート」と呼ぶことにする）をベースとしながら記述する。記述の仕方としては、あるモダリティの意味を担う言語形式を列挙する方式と、ある言語形式が担うモダリティの意味を列挙する方式とがあるが、本稿では前者の方式を採用する。

モダリティは、必ずしも現実には起こっていない状況についての、あるいはそのような状況に基づいての、推論や判断に関わる。例えば、AさんがBさんに「マレーシア語を勉強したいならば、東京外国語大学を受けるべきだ」と助言したとする。このとき、Bさんは必ずしも既にマレーシア語を勉強している必要はないし、東京外国語大学を受験する必要もない。つまり、「p たい」や「p べき」というモダリティ形式は、命題 p が真であることを意味論的に含意しない。このようなモダリティの意味を分類するのに、本稿では Portner (2009) の分類を採用する。図 1 は、彼の分類と 2 種類の伝統的な分類を比較して示したものである。

Portner の分類は、モダリティ要素のスコープとなる命題（上の例の p の部分）が実際に実現する可能性や必然性についての推論や判断がどのような観点からなされるかに基づいている。そのような観点を Kratzer (1981, 1991) は「会話の背景 (conversational background)」と呼んでいる¹。認識モダリティは、会話の背景が知識の場合である。優先モダリティの会話の背景は状況で、ある状況を他の状況と比べて、一方が他方より優先されるという判断がなされる場合である。動的モダリティも状況が会話の背景となるが、複数の状況間の優先関係ではない。これら 3 つのモダリティ範疇は、それぞれ第 2 節、第 3 節、第 4 節で論じる。下位分類がある場合は、該当する節でその都度、その意味について簡単な説明を加える。アンケートの項目のうち、これら 3 つの範疇にきれいに収まらないものについては、

*本稿の執筆にあたり、Muhammad Idham Adli bin Musa, Sarah Rashiqah binti Abdul Rashid, Saiful Bahari bin Ahmad の 3 氏にコンサルタントとしてご協力いただいた。ここに感謝の意を記したい。

¹ Kratzer (1981, 1991) に基づく標準的な分析では、モーダル文の解釈には、様相母体 (modal base) と順序源 (ordering source) の 2 つの会話の背景が関与する。前者は接近可能 (accessible) な可能世界を決定し、後者はそのようにして決定された可能世界を理想に近い順に並べる。厳密にはこれらを区別して議論すべきだが、ここでは順序源を無視し、「会話の背景＝様相母体」というように単純化することにする。

Portner の分類：	認識 epistemic	優先 priority			動的 dynamic	
		義務 deontic	目的 teleological	希望 bouletic	意志的 volitional	量化 quantificational

伝統的な分類：	認識 epistemic	根源 root			
	認識 epistemic	義務 deontic		動的 dynamic	X

図 1 Portner (2009)によるモダリティの分類と伝統的分類の比較

第 5 節にまとめた。第 6 節は、全体のまとめおよび関連する考察である。

本稿で示すデータは、マレーシア国内の地域方言の差を超えて使われる、マレーシア語の標準方言のものである。標準方言においては、書き言葉と話し言葉があり、2 つの変種の間の差は大きく、ダイグロシヤ状況を生んでいる。従って、理想的には、2 つの変種を厳格に区別して記述するのが望ましい。しかし、モダリティに関する語彙の面では、両者の間に大きな隔たりはないように思われるので、本稿では書き言葉と話し言葉を完全に区別することはしていない。基本的には、コンサルタントへの聞き取り調査によって得られたデータをそのまま掲載し、データ全体での変種の統一を図るための翻訳などは行っていない。全体としては、話し言葉の例文が多いが、一部書き言葉的なものも混ざっている。

以下、各モダリティについて、それを表す言語形式を見ていく。なお、通常、各類について複数の言語形式が対応するが、それらの間に相違がないということではない。同一の類に属すモダリティ要素の間の意味的、統語的相違は興味深い研究テーマであるが、筆者の知る限り、詳細な研究はまだなされていない。本稿の目的はマレーシア語のモダリティの概略を示すことであるが、そのような点についても、なるべく記述することにする。また、本稿に挙がっている形式は、飽くまで代表的なもののみであり、網羅的ではないことに注意されたい。アンケートの例文番号は、マレーシア語の例文の日本語訳の後に[]に入れて示してある。

2. 認識モダリティ (epistemic)

「認識」の中には、アンケートで「確信」、「推量」、「可能性」、「視覚／聴覚以外の感覚による判断」、「伝聞」、「疑念」とされている項目が含まれる。この種のモダリティは、モダリティ要素がスコープにとる命題の実現可能性の程度に関する、知識に基づいた推論に関わる。これらの意味は、(1)に挙げた要素により表される。

- (1) a. 助動詞 : mesti
 b. 副詞 : sepatutnya, mungkin, barangkali, entah-entah, macam
 c. 形容詞 : pasti

まず、命題の実現可能性がほぼ必然に近い場合、mesti, sepatutnya, pasti が用いられる。これは、アンケートでいう「確信」に相当する。

- (2) Mereka tak sampai lagi. Ini mesti kereta rosak di tengah jalan.²
 3PL not reach yet this must car broken at middle way
 「彼らがまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたに違いない。」 [17]
- (3) Mereka sepatutnya/pasti sudah sampai kerana mereka bertolak awal pagi.
 3PL supposedly/certain already reach because 3PL leave early morning
 「朝早く出発したから、彼らはもう着いているはずだ。」 [15]

実現可能性がそれよりも低い場合には mungkin, barangkali, entah-entah, macam が用いられる。これは、アンケートでいう「推量」と「可能性」に相当すると思われる。

- (4) Mungkin/Barangkali orang itu tidak datang hari ini.
 maybe/probably person that not come today
 「あの人は今日はたぶん来ないだろう。」 [16]
- (5) Entah-lah. Mungkin dia ada di rumah, mungkin tidak (ada).
 don't.know-PART maybe 3SG be at home maybe not be
 (昼間だから)「さあ、彼は家にいるかもしれないし、いないかもしれない。」 [18]
- (6) Entah-entah mereka belum tiba lagi kerana kereta rosak di tengah jalan.
 perhaps 3PL not.yet arrive yet because car broken at middle way
 「きっと途中で車が壊れたから彼らはまだ来ないんじゃないか。」 [17]
- (7) Macam demam (a)je.
 like fever only
 (額に触ってみて)「どうも (あなたは) 熱があるようだ。」 [19]

(4)と(5)では、同じモダリティ要素、すなわち mungkin が用いられているものの、命題の実現可能性の程度は(4)の方が高い。この差は語用論的含意により生じるものであり、mungkin

² Leipzig Glossing Rule にない略号 : PART: particle; PERF: perfect.

がアンケートでいう「推量」と「可能性」において曖昧である、ということにはならないことに注意したい。当該の命題（「あの人が今日来ない」）の否定に言及していない(4)では、命題が実現する可能性の方が実現しない可能性よりも高いことが語用論的に含意される。(5)では、当該の命題（「彼が家にいる」）の否定、すなわち「彼が家にいない」を同一のモダリティ要素 *mungkin* によりモーダル化した文を明示的に付け加えることで、(4)で得られるような語用論的含意が打ち消されている。アンケートでいう「可能性」が *Mp, M-p* (*M* はモダリティ要素) という形式の適格性により定義されるのならば、 *mungkin* は「可能性」に分類されることになる。

(6)の *entah-entah* は、その語根 *entah* が「知らない」という意味で、否定の意味を含んでいる。よって、アンケートでいう「疑念」に類似するのかもしれない。

(7)の *macam* は、英語の *like* に相当し、「～のような、ように」という意味の前置詞としての用法に加え、(とりわけ口語で) 談話小辞 (*discourse particle*) としての用法があり、ここでは後者である。通常、文末に(a) *je* (文語: *sahaja*) が共起する。この文では、話者が推論に用いる知識の一部、具体的には聞き手の額の温度が、触覚により得られているが、 *macam* はアンケートでいう「視覚／聴覚以外の感覚による判断」に特化して用いられるわけではない。例えば、建物の地下にいて雨が降り始めたことを知らなかったが、濡れた傘を持った人が大勢、建物に入って来るのを見て、(8)のように言うことができる。また、娘が学校で聞いて得た知識をもとに母親に対して、(9)のように言うこともできる。

(8) *Macam hujan je.*

like rain only

「雨が降っているみたいだ。」

(9) *Halimah macam nak pindah.*

Halimah like will move

「ハリマちゃん、引っ越すそうだよ。」

推論の根拠となる知識がもつぱら「伝聞」による場合、 *menurut/mengikut* 「～によれば」により情報源を明示することで表現できる。下の例で、助動詞 *akan* が生起しているのは、「伝聞」の意味のためではなく、雨が降るのが発話時点よりも後であることを示すためである。

(10) *Menurut/Mengikut ramalam cuaca, esok akan hujan.*

according.to forecast weather tomorrow will rain

「天気予報によれば、明日は雨が降るそうだ。」 [20]

3. 優先モダリティ (priority)

3.1. 義務モダリティ (deontic), 目的モダリティ (teleological)

「義務」, 「目的」の中には, アンケートで「義務」, 「評価的義務」, 「推奨」とされている項目が含まれる. この種のモダリティは, モダリティ要素がスコープにとる命題の実現可能性に関する, 規則・法則や慣習・習慣 (「義務」) あるいは特定の目的の達成 (「目的」) の観点に基づく判断に関わる³. これらの意味は, (11)に挙げた要素により表される.

- (11) a. 助動詞: mesti, harus, perlu, hendaklah
b. 副詞: semestinya, seharusnya, sewajibnya, sepatutnya, sewajarnya
c. 形容詞: wajib, patut, wajar, lebih baik/bagus
d. 動詞: kena, terpaksa

(11a)の hendaklah は, 願望の助動詞 hendak に発話内効力 (illocutionary force) に関係する小辞 lah が付加した形式である. (11b)の副詞は, いずれも接辞 se-...-nya が助動詞または形容詞の基体に付加することにより派生されたものである. sewajibnya は文学的表現である. (11d)の kena は口語に特有の語彙であり, 統語的には助動詞ではなく cuba 「~しようと試みる」などの動詞と同様に振舞う (Nomoto & Kartini, 査読中)⁴.

³ あるいは, その目的を達成したいという願望の観点からの判断とも解釈できる. その場合, 次節の「希望」に分類されることになる.

⁴ この類の述語は, 受動態の動詞句を補部にとるとき, その外主題役割 (external theta role) が補文中の動詞の内項にも外項にも対応し得る. 例えば, (i)では, 「しようとする/したい」主体は, 愛する主体であるシティにも愛される対象であるエイミーにも解釈され得る. (このような曖昧性は文脈により解消され, 母語話者も気付かないことが多い.)

- (i) Amy cuba/mahu di-cintai (oleh) Siti.
Amy try/want PASS-love by Siti
a. 「シティはエイミーを愛そうとした/愛したい。」
b. 「エイミーはシティに愛されようとした/愛されたい。」

kena 文についても同様の曖昧性が生じる (kena の意味についてはさらに説明を要するので, Nomoto and Kartini (査読中) を参照されたい).

- (ii) Penyeluk saku itu kena di-tangkap (oleh) polis.
pickpocket that (have.)got(.to) PASS-catch by police
a. 「警察はそのスリを捕まえなければならない。」
b. 「そのスリは警察に捕まえられ (てしまっ) た。」

これら種々の形式は、モダリティの力 (modal force) の面で異なる。モダリティの力が強ければ強いほど、命題の不履行が許されなくなる。コンサルタントのうちの1人の直感では、下の(12)に示された順で命題不履行の許容度が高くなる。つまり、左にあるものほど、モダリティの力が強い。真ん中の2つのカテゴリーにある種々の形式の相対的な順序については、話者の間で揺れがある。(11d)の *terpaksa* は、意志に反して「～せざるを得ない」という意味であり、すべてのコンサルタントが(12)の階層に含めることを避けた。

- (12) (se)mesti(nya) < (se)harus(nya) < (se)wajar(nya) < hendaklah
 (se)wajib(nya) (se)patut(nya) perlu
 kena

(13)–(15)は、これらのモダリティ要素を含む例文である。

- (13) Kami *mesti/harus/perlu/terpaksa* pulang sekarang kerana sudah lewat.
 1PL must/should/need/forced return now because already late
 「遅くなったので、私たちはもう帰らなければならない。」 [3]
- (14) Kami (nak) *kena* balik. Dah lambat.
 1PL will have.to go.back already late
 「私たちは帰らなくちゃいけない。もう遅くなっちゃったし。」 [3]
- (15) Walaupun kita sudah berjaya, kita *mesti/wajib/harus/patut/wajar/*
 although 1PL already succeed 1PL must/obligatory/should/should/proper/
hendak-lah/sewajibnya/seharusnya/sepatutnya/sewajarnya menerima kata-kata
 want-PART/obligatorily/supposedly/supposedly/properly accept words
 nasihat ibu bapa.
 advice parents
 「どんなに成功しても、親の言うことを聞くべきだ／ものだ。」 [5]⁵

(13)–(14)では、時刻が遅いという状況のもとでは、帰るという行為を遂行せねばならないと判断している。その判断の基準となる観点には、様々なものが考えられる。例えば、夜7時には必ず帰宅していなければならないという家庭内の取り決め、夕食時を過ぎても他人の家に居続けるのはよくないという社会通念、終電の時間に間に合うように駅に着くと

この類の述語の多くは、優先モダリティあるいは動的モダリティに関わる意味を持つ。

⁵ アンケートの文は、「歳を取ったら、子供の言うことを聞くべきだ／ものだ」であったが、マレーシアの社会慣習にそぐわないので変更した。

いう目的（の実現）などである。(15)では、親というのは自分がどんなに年をとろうと、偉くなろうと、常に尊敬し続けるものであるというマレーシアの社会通念に基づいて、親の言うことを聞くという行為を遂行せねばならないと判断している。判断の基準が慣習や社会通念である場合、アンケートでいう「評価的義務」にあたると思われる。

アンケートでいう「推奨」は、形容詞 *baik/bagus* 「よい」の比較級 *lebih baik/bagus* 「よりよい」を文頭に置くことで表される。(16)は、傘を持って出かけるという行為を、「雨に濡れないように」という目的という観点から、他の行為と比較しているので、「目的」に分類できる。

(16) *Lebih baik/bagus* keluar bawa payung. Akan hujan katanya.

more good go.out bring umbrella will rain it.is.said

「傘を持って出かけた方がいいよ。雨が降るそうだから。」[4]

比較の対象となる他の行為は、通常の比較文と同様に、前置詞 *daripada* 「～より」により導入される。

(17) *Lebih baik* [kamu naik kereta api] daripada [(naik) basikal] kerana hujan.

more good 2SG get.on train from get.on bicycle because rain

「雨が降っているから、自転車(に乗って行く)よりも電車に乗って行った方がいい。」

3.2. 希望モダリティ (bouletic)

「希望」の中には、アンケートで「希望」、「勧誘」とされている項目が含まれる。この種のモダリティは、モダリティ要素がスコープにとる命題の実現可能性に関する、主語の抱く願望に基づいた話者の判断に関わる。この意味は、(18)に挙げた要素により表される。

(18) a. 助動詞 : *nak/hendak, mau/mahu, (ter-)ingin*

b. 副詞 : *harap-harap*

c. 動詞 : *nak/hendak, mau/mahu, (ber-)harap*

nak/hendak, mau/mahu には、助動詞の用法と動詞の用法がある。

主語により制御可能な事態に関する「希望」には、助動詞 *nak* (文語形 : *hendak*), *mau* (文語形 : *mahu*), *(ter-)ingin* が用いられる。主語の人称制限はない。

(19) *Nak makan sesuatu. Lapar-lah.*
 want eat something hungry-PART
 「何か食べたいなあ。お腹空いたよ。」 [6]

(20) *Dia nak/ingin/teringin ke bandar.*
 3SG want to city
 「彼（女）は街へ行きたがっている。」 [23]

nak/hendak, mau/mahu は、英語の *will* と同様、参照時点より後に出来事が生じる（あるいは出来事を生じさせる）ことを表すのにも用いられる。

- (21) a. *Dia nak mulakan kerja itu dari sekarang.*
 3SG will start work that from now
 「彼はこれからその仕事を始めようとしている。」
 b. *Dari se-minggu yang lalu dia sudah nak mulakan kerja itu.*
 from one-week that past 3SG already will start work that
 「彼は1週間前にはもうその仕事を始めようとしていた。」

制御不可能な事態に関する「希望」は、動詞(*ber-*)*harap* 「望む」が節を後にとる形式や *harap* の重複形を文頭に置く形式が用いられる。

- (22) a. *Saya (ber-)harap esok tak hujan.*
 1SG hope tomorrow not rain
 「明日、雨が降らないといいなあ。」 [10]
 b. *Harap-harap tak hujan esok.*
 hopefully not rain tomorrow
 「明日、雨が降りませんように。」 [10]

制御可能な事態に対する「希望」の文を疑問文にすることで、（相手の意向が不明な場合の）「勧誘」を表すことができる。

- (23) a. *Mau makan bersama?*
 want eat together
 「一緒に食べたいですか？」 [9]

- b. *Nak tak, makan sama-sama?*
 want not eat together
 「一緒に食べたくない？」 [9]
- c. *Tak nak makan sama ke?*
 not want eat together Q
 「一緒に食べたくないの？」 [9]

なお、これらの表現は文法的には正しいが、他人を食事に誘う際には、(Su)Dah makan? 「もう食べた？」という婉曲的な定型表現を用いるのがより普通である。(23)のような表現は、日本語訳にも感じて取れるように、押し付けがましく聞こえるという。

一般的な「勧誘」には、命令文の先頭に *jom* または *mari* を付加した形式が用いられる。(24b)のように動作主を明示的に述べることも可能である。動作主には、1 人称複数包括形の *kita* か同じく話者を含む複数の人を指す *semua* 「みんな」、あるいはその組み合わせ *kita semua* 「私たち全員」のみが可能である。

- (24) a. *Jom/Mari makan tengah hari sama-sama.*
 let's eat noon together
 「一緒に昼ごはんを食べましょう。」 [8]
- b. *Jom/Mari {kita/semua/kita semua} makan tengah hari sama-sama.*
 let's 1PL/all/1PL all eat noon together
 「一緒に昼ごはんを食べましょう。」 [8]

jom は単独で、*Jom!* 「さあ～しよう」と勧誘の目的で用いることもできる。「～」の部分は文脈により決定される。*mari* も単独で用いられるが、「(こっちへ) おいで」という意味にしかない。

4. 動的モダリティ (dynamic)

4.1. 意志的モダリティ (volitional)

「意志的モダリティ」の中には、アンケートで「能力可能」、「状況可能」、「許可／状況可能」とされている項目が含まれる。この種のモダリティは、モダリティ要素がスコープにとる命題が、意志を持つ主体により実現可能か否かの判断に関わる。実現可能性が何に左右されるかによりさらに、「能力」(ability)、「機会」(opportunity)、「気質」(dispositional)に分けることができる。「能力」は、命題の実現が可能なのが、主体自身が備え持つ能力のためである場合で、アンケートでは「能力可能」と呼ばれている。「機会」は、命題の実現が、それに適切な環境が存在するために可能になる場合で、アンケートでは「状況可能」

に相当する。「気質」は、命題の実現可能性が主体の性格や傾向に左右される場合である。これらの意味は、(25)に挙げた要素により表される。

- (25) a. 助動詞 : *boleh, dapat, mampu, akan*
b. 接辞 : *ter-*

akan は未然のアスペクト標識でもある。

「能力」には、*boleh, dapat, mampu* が用いられる。マレーシア語の文法書では接辞 *ter-* にも「能力」の意味があるとされる。しかし、私は *ter-* の意志的モダリティの意味は、*boleh, dapat, mampu* などと違い、副次的なものであると考える。よって、*ter-* については 4.3 節で別に議論することにする。

- (26) *Orang itu boleh/dapat/mampu (mem-)baca tulisan Cina.*
person that can read writing China
「あの人は中国語が読めます。」 [13]

「あの人が中国語を読む」という命題の実現が可能なのは、主語の人物がそれを可能にする能力を備え持っているからである。*dapat* は、能力のない状態から能力のある状態への変化をその意味に含む⁶。(27)と(28)の差がこれを示す。一般に、鳥は生まれつき空を飛べるので、(27)では能力面での変化がない。よって、*dapat* の使用が不適格である。一方、(28)では、ペンギンは生来飛べるものではないという一般的な知識と文脈により能力面での変化が明らかなので、*dapat* を自然に使うことができる。

- (27) *#Burung dapat terbang.*

bird can fly

「鳥は空を飛ぶことができる。」

- (28) *Mungkin kamu tidak percaya, tetapi setelah menjalani latihan penguin itu
maybe 2SG not believe but after undertake training penguin that
sudah dapat terbang.
already can fly*

「信じられないだろうが、そのペンギンは訓練をした結果、空を飛べるようになった。」

⁶ ちなみに、*dapat* は「得る」という意味の動詞としても用いられる。*dapat* を含む文は到達 (achievement) の状況アスペクトを表し、やはり変化をその意味に含む。

これに関連し, *dapat* は完了アスペクトの文において, そのスコープにある出来事が実際に起こったことを含意する (actuality entailment; cf. Bhatt 1999). *dapat* を含む(29)の文の後に, 「自分の足で歩く」ことが既に実際に起こったことを示す(29a)を続けることはできるが, 「自分の足で歩く」ことがまだ実際には起こっていないことを示す(29b)はうまく続かない.

(29) Dua hari selepas pembedahan Ali sudah dapat berjalan dengan kaki sendiri.

two day after operation Ali already can walk with foot own

「手術の2日後, アリはもう自分の足で歩けるようになった。」

a. Oleh itu, hari ini dia telah keluar berjalan di taman berdekatan.

by that today 3SG PERF go.out walk at park nearby

「そこで, 今日, 彼は近くの公園に散歩に出かけた。」

b. #Tapi, dia masih belum cuba untuk berjalan dengan kaki sendiri.

but 3SG still not.yet try to walk with foot own

「でも, まだ(本当に)自分の足で歩けるか, 試していない。」

boleh と *mampu* には, このような差は観察されない. コンサルタントの中には, *dapat* を含む文は, *boleh* と違い, 過去のことを表すと指摘する人もいた. このような直感も *dapat* が変化をその意味に含むならば, 納得がいく. なぜなら, *dapat* の表す変化は参照時点 (reference time) よりも前に起こっていると解釈するのが普通だからである.

能力があっても, その能力を発揮できる環境が提供されていなければ, 命題は実現しない. 環境が提供された上で, 命題の実現が可能になる場合が, 「機会」である. 「機会」にも, 「能力」と同じ *boleh*, *dapat*, *mampu*, *ter-*が用いられる. *ter-*については, 4.3 節で取り上げる.

(30) Saya tidak boleh/dapat/mampu (mem-)baca apa yang ditulis di sini

1SG not can read what that be.written at here

kerana gelap.

because dark

「暗くて, ここに何て書いてあるのか読めない。」 [14]

boleh は, それがスコープとする命題の遂行を許可する発話内効力を持ち得る. この機能は, アンケートでは「許可/状況可能」と呼ばれている.

(31) *Kamu boleh pulang jika kamu sudah habis kerja itu.*
2SG can return if 2SG already finish work that
「その仕事が終わったら、帰ってもいいですよ。」 [1]

dapat や *mampu* にはこのような発話内効力はなく, (31)の *boleh* を *dapat* や *mampu* で置き換えた文は, ただ事実を述べるだけである.

アンケートでいう「禁止」と「懇願」はそれぞれ, 「機会」の *boleh* 文の否定文, 疑問文で表現することができる.

(32) (*Kamu*) *Tak boleh makan sebab dah basi.*
2SG not can eat because already stale
「腐っているから (あなたはそれを) 食べてはいけない。」 [2]

(33) *Boleh saya pinjam pen itu?*
can 1SG borrow pen that
「そのペンを貸していただけませんか？」 [12]

「禁止」は, 否定辞 *jangan* を用いた命令文で表すこともできる.

(34) *Jangan makan. Dah basi.*
don't eat already stale
「食べるな. もう腐ってる。」 [2]

ちなみに, (32), (34)の「いけない」の部分は, *Tak boleh!* 「いけない!」, *Jangan!* 「だめ!」のように, 単独で禁止を表すこともできる.

主体となる人物に命題を実現する能力があり, さらに命題実現を可能にさせる環境が提供されたても, その人物が能力の行使を進んで行わなければ, 命題は実現しない. このように, 命題の実現可能性が主体の性格や傾向に左右される場合が「気質」にあたり, 助動詞 *akan* により表される.

(35) *Dia akan datang kalau awak yang suruh.*
3SG will come if 2SG that ask
「彼は君が頼めば来る (だろう).」

4.2. 量化モダリティ (quantificational)

この種のモダリティは, 通常のモダリティ的意味に加え, 量化副詞 (例: 「いつも」, 「た

いてい」、「ときどき」の意味をも持つ。これらの意味は、(36)に挙げた要素により表される。

(36) 助動詞： akan, boleh

可能な状況に対する量化が全称量子子による場合は akan, 存在量子子による場合は boleh が用いられる。

(37) Anjing akan gigit orang.

dog will bite person

「犬は人に噛みつくものだ。」(≈「犬はたいいてい人に噛みつく。」)

(38) Anjing boleh gigit orang.

dog can bite person

「犬は人に噛みつくことがある。」(≈「犬はときどき人に噛みつく。」)

4.3. 意志的モダリティの ter-について

接辞 ter-は, boleh, dapat, mampu と同様, 「能力」, 「機会」を表すことができる。しかし, その用法には制限があり, 自然に得られるテキストの中での頻度は極めて低い⁷。boleh などの助動詞が使用できる環境であっても, ter-は使用できないことが多い。例えば, 4.1 節で見た「能力」, 「機会」の例文(26), (30)の助動詞 boleh などを ter-に置き換えることはできない。

(39) *Orang itu ter-baca tulisan Cina. cf. (26)

person that TER-read writing China

(「あの人は中国語が読めます」の意で)

(40) *Saya tidak ter-baca apa yang ditulis di sini kerana gelap. cf. (30)

1SG not TER-read what that be.written at here because dark

(「暗くて, ここに何て書いてあるのか読めない」の意で)

私は, 意志的モダリティの ter-の使用にこのような制限があるのは, 意志的モダリティの意味が ter-の他の用法から副次的に得られるためであると考ええる。ter-は, 完結のアスペ

⁷ 具体的には, 鶴沢 (2009) が童話テキストを調べ 88 例中 5 例 (5.68%), Chung (2011) が Utusan Malaysia 紙 (2005 年) と Sejarah Melayu (『マレー年代記』, 1808 年写本) を調べ, それぞれ 343 例中 1 例 (0.29%), 697 例中 45 例 (6.46%) という数字を出している。

クトをその意味の核とし、しばしば行為の結果に焦点を置き、「非意図的／偶発・自発的行為」、「結果状態」、「最上級」、「能力／可能（＝機会）」といった意味を表す（Winstedt 1927; Chung 2011）。上の(39)は「能力／可能」の解釈はないものの、「あの人は（その）中国語を読んでしまった」という「非意図的／偶発・自発的行為」の解釈ならば容認可能である。

ter-が表す「能力／可能」は普通、当該の行為が完結した状態にあることに基づく。この場合のter-は「結果状態」の用法であり、「能力／可能」のモダリティの意味はそこから副次的に得られる。例えば、(41)の文で最も優勢な解釈は、主語である人物には中国語の正書法の知識があるものの、読まなければならない中国語の（文字の）量が多すぎるなど、何らかの困難があるために、読むという行為が完結しない、という解釈である。

- (41) Orang itu tak ter-baca tulisan Cina.
person that not TER-read writing China
「あの人は中国語が読めなかった。」

この文には、すべての話者が容認するわけではないものの、主語である人物は中国語の正書法の知識を持っていると思っていたものの、実際には中国語を読めなかったという別の解釈も可能である。この解釈は、明らかに ter-の「非意図的／偶発・自発的行為」の用法と関連がある。「能力／可能」の意味が「非意図的／偶発・自発的行為」の用法に基づく場合も、ter-動詞文の表す事態には何らかの困難が伴うことが多い。コンサルタントによれば、次の(42)の文は *sungguhpun usianya sudah lanjut* 「彼はもう年だが」の部分がないと不自然だという。また、それに加え、動詞 *terangkat* 「持ち上げられる」の目的語も、ただの椅子ではなく、重い椅子となっている。

- (42) *Sungguhpun usia-nya sudah lanjut, dia masih ter-angkat kerusi yang berat*
although age-3SG already advanced 3SG still TER-raise chair that heavy
*itu.*⁸
that
「彼はもう年だが、まだその重い椅子を持ち上げられる。」

私の分析では、「非意図的／偶発・自発的行為」の意味は、断定内容（assertion）となる ter-なしの文の表す命題 *p* の否定であるような前提（presupposition） $\neg p$ が ter-により誘発され

⁸ シャイク・オマー・モハメッド、山崎あずさ。1996。『オマー・アズーのマレー語講座』めこん。p. 170。

るために生じる⁹。上の文では、椅子を持ち上げるのを困難にするような表現が「もう年な上に、椅子も重いから、持ち上げ（られ）るはずがない」というように、前提の誘発を補助する役割を担っている¹⁰。

ter-が「能力／可能」を表すのはもっぱら否定文においてであることはよく知られている。肯定文では「能力／可能」を表さなくても、対応する否定文においては「能力／可能」の意味が認められることがある。上の(39)と(41)のペア（以下に(43a), (43b)として再掲）がその例である。

- (43) a. *Orang itu ter-baca tulisan Cina.
person that TER-read writing China
（「あの人は中国語が読める」の意で）
b. Orang itu tak ter-baca tulisan Cina.
person that not TER-read writing China
「あの人は中国語が読めなかった。」

否定文で「能力／可能」の意味が出やすいのは、一般に「能力／可能」の意味につながりにくい「非意図的／偶発・自発的行為」の ter-文であっても、否定辞が文全体をスコープとする場合には、「能力／可能」の意味が発生しやすくなるためである。(43b)を例にとると、スコープ関係は tak [orang itu terbaca tulisan Cina] のようになり、前提 ([] 内の ter-動詞文に基づく) も断定内容も「あの人が中国語を読まない」という同じ命題になる。よって、「予測通り、やはりあの人は中国語を読まない」ということで、能力の欠如や不可能の解釈に容易につながる¹¹。肯定文ではこのように前提と断定内容が一致することはない。肯

⁹ この分析は Soh (2009)の北京語の文末に現れる-le（了）の分析にヒントを得ている。北京語の文末の-le はアスペクトの意味と「予測に反して」という意味を持ち、マレーシア語の ter-とよく似ている。両者の大きな違いはその統語的位置である。マレーシア語の ter-は動詞接辞であり、文末の-le よりむしろ動詞に後接する-le の方にあたる。

¹⁰ Soh (1994), Siraj (2010)は、ter-の「非意図的／偶発・自発的行為」の意味を、それぞれ事象構造、希望モダリティの観点から分析し、前提の概念は用いていない。そのため、彼らの分析では、ter-動詞文が「能力／可能」を表すとき、(42)の文のように困難な状況をしばしば伴うのがなぜなのかは不明である。

¹¹ ちなみに、否定辞が表層の位置で解釈される場合は、前提が「あの人が中国語を読む」、断定内容が「あの人が中国語を読まない」で、「あの人は中国語を読んでしまわない」という「非意図的／偶発・自発的行為」の解釈が得られる。Asmah (1970)は、ter-は否定文では「非意図的／偶発・自発的行為」の用法を持たないと述べている。しかし、実際にはそのような制限はないようである。下の(i)の文はブログから採ったものであり、コンサルタントへの調査によっても自然な文であることが確認された。

肯定文と否定文で「能力／可能」の意味の得られやすさに差があるのはこのためである。

(40) ((44a)として下に再掲) は否定文でも「能力／可能」の意味を持たないが、(44b)のように受動文にすれば「能力／可能」の意味が発生する。

- (44) a. *Saya tidak ter-baca apa yang ditulis di sini kerana gelap.
 1SG not TER-read what that be.written at here because dark
 b. Apa yang ditulis di sini tidak ter-baca oleh saya kerana gelap.¹²
 what that be.written at here not TER-read by 1SG because dark
 「暗くて、ここに何て書いてあるのか読めない。」

これは、「暗くて」という理由が、能動文の主語の「私」が主体的に行う「ここに書いてあることを読む」という行為を未完結にするには不十分であるのに対し、受動文の主語である「ここに書いてあること」を読まれない状態にするのには十分であることによると考えられる。理由の部分により直接的に事態の未完結につながるものに変えれば、態に関係なく「能力／可能」の解釈が得られる。

- (45) a. Saya tidak ter-baca apa yang ditulis di sini kerana saya ada
 1SG not TER-read what that be.written at here because 1SG have
 banyak lagi benda untuk dibaca.
 a.lot more thing to be.read
 「私は、他に読むべきものがたくさんあって、ここに書いてあるものを読めない。」
 b. Apa yang ditulis di sini tidak ter-baca oleh saya kerana saya ada
 what that be.written at here not TER-read by 1SG because 1SG have
 banyak lagi benda untuk dibaca.
 a.lot more thing to be.read

-
- (i) harap2 puan bos saya tak ter-baca kenyataan ini :)
 hopefully Mrs. boss 1SG not TER-read statement this
 「私の上司がこの文章を読んでしまわなければいいけど :)」

(<http://munira.inter.net.my/2009/10/kegilaan-baru.html>, アクセス日 : 2010/12/20)

¹² ter-動詞文では、能動態にも受動態にも明示的な態標識が現れない。Nomoto & Kartini (査読中) は kena 文にも同様の態交替が関与していると主張している。マレーシア語と方言関係にあるインドネシア語にはこのような態交替は存在しないとされている。これに対し、Nomoto & Kartini (2011)では、そのような態交替が実際には存在する可能性を指摘した。

「私は、他に読むべきものがたくさんあって、ここに書いてあるものは読めない。」

5. その他

この節では、アンケート項目にはあるものの、上の分類には登場していないものについて言語事実を報告する。これらは、「反実仮想」(5.1 節)、「命令文」(5.2 節)、「反語」(5.3 節)、「付加疑問文」(5.4 節)の4つに分けられる。

5.1. 反実仮想

マレーシア語には、反実仮想文で義務的に用いられる特別な文法形式はない。假定文の条件節が単なる假定や条件ではなく、「反実仮想」であることを示すには、様々な手段がある。まず、条件節を導く接続詞は通常 *kalau* や *jika* であるが、(46)の例のように発話内効力に関わる小辞 *lah* を付加したり、*kalau* や *jika* の代わりにより仮定の意味が強い *seandainya* 「仮に〜だとしたら」を用いることができる。(46)–(47)の帰結節では、いずれもモダリティ要素が現れている。これはイタリック体で示してある。

- (46) a. *Kalau-lah saya ada duit, saya akan beli kereta itu.*
if-PART 1SG have money 1SG will buy car that
「もしお金があつたら、あの車を買うんだけれどなあ。」 [21]
- b. *Kalau-lah saya ada duit, mesti dah beli kereta itu.*
if-PART 1SG have money must already buy car that
「もしお金があつたら、あの車を買っているんだけれどなあ。」 [21]
- (47) a. *Aku patut datang awal lagi.*
1SG should come early more
「もっと早く来るべきだった。」 [27]
- b. *Lebih bagus kalau datang awal.*
more good if come early
「もっと早く来たらよかった。」 [27]

マレーシア語には時制が存在しないので、過去の状況についての反実仮想についてでも、現在の状況についての場合と違いはない。

- (48) Kalau awak tidak ajar saya, mesti saya tidak sampai di situ.
 if 2SG not teach 1SG must 1SG not reach at there
 「もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。」 [22]

マレーシア語では、条件節だけで独立した文として機能する、いわゆる脱従属化 (in-subordination) が可能である。

- (49) a. Kalau awak pergi sama (, macam mana)?
 if 2SG go together how
 「あなたも一緒に行ったら (どうですか) ?」 [28]
 b. (Apa kata) kalau awak pergi sekali?
 what say if 2SG go together
 「あなたも一緒に行ったら (どうですか) ?」 [28]

5.2. 命令文

2人称に対する「命令」には、命令文の形式が用いられる。(51)は, *biar* 使役文の命令文で, (52)は *bagi* 許可文の命令文である。

- (50) Cepat bawa barang itu ke sini. Saya akan tunggu di sini.
 quick bring thing that to here 1SG will wait at here
 「すぐにそれを持って来なさい。私はここで待っています。」 [11]
- (51) a. Biar orang itu bawa barang ini.
 let person that bring thing this
 「これはあの人に持って行かせろ。」 [25]
 b. Biar saya bawa.
 let 1SG bring
 「私が持ちましょう。／私に持たせて下さい。」 [7]
- (52) a. Bagi orang itu bawa barang itu.
 give person that bring thing that
 「これはあの人に持って行かせよう。」 [25]
 b. Bagi aku minum itu sikit.
 give 1SG drink that a.little
 「僕にもそれを少し飲ませろ。」 [24]

マレーシア語には、「あとで～せよ」という意の、遠未来に特有の命令形式は存在しない。通常の命令文に「あとで」という意味の語句（下の例では *kemudian*）が付け加えられるだけである。

- (53) *Kuih atas meja tu, makan kemudian.*
cake on table that eat later
「そのテーブルの上のお菓子は、後で食べなさい。」 [26]

5.3. 反語

「反語」の文には、*mana* が用いられる。この語には「どこ、どちら」を意味する疑問詞としての用法もある。

- (54) *Mana aku tahu./ Aku mana tahu.*
where 1SG know 1SG where know
「俺がそんなこと知るか。」 [29]

5.4. 付加疑問文

マレーシア語の付加疑問文では、*kan* または *bukan* が用いられる。後者は否定辞としても用いられる。

- (55) *Ni mesti mak yang buat, kan? — Tak. Saya yang buat.*
this must mum that make right not 1SG that make
「これを作ったのは、お母さんだよね？—いいえ。私が作ったのよ。」 [30]

6. まとめ

第2-4節に登場した、モダリティ要素をまとめると表1のようなになる。第1節でも述べたように、本稿で言及されている形式がマレーシア語のモダリティ形式すべてを網羅しているわけではない。また、分類、特に優先モダリティ内の3つの下位範疇については、個々の形式について個別的に、文脈等を細かく設定して調査をしたわけではなく、代表的な数個の形式についての結果が同種の他の形式にも当てはまるだろう、という程度で表を作成している。このような問題は残るが、この表によりマレーシア語のモダリティ要素の概略は把握できると信じる。

この表からはっきりと見て取れることの1つは、モダリティで中核をなすのは優先モダリティである、ということである。優先モダリティは、コンサルタントから得られた形式の数が最も多く、統語範疇の上でも多様である。認識モダリティはもっぱら副詞により表

表 1 マレーシア語のモダリティ要素

	認識	優先		動的	
		義務・目的	希望	意志的	量 化
助 動 詞	mesti			akan, boleh	
		harus, perlu		dapat, mampu	
		hendaklah	nak/hendak		
			mau/mahu, (ter-)ingin		
副 詞	sepatutnya				
	mungkin, barangkali, entah-entah, macam	semestinya, seharusnya, sewajibnya, sewajarnya			
			harap-harap		
形 容 詞	patut				
	pasti	wajib, wajar, lebih baik/bagus			
動 詞		kena, terpaksa			
			nak/hendak, mau/mahu, (ber-)harap		
接 辞				ter-	

される。動的モダリティは助動詞のみにより表される。これに対し、優先モダリティは、これらの範疇に加え、形容詞や動詞によっても表される。認識モダリティで唯一の助動詞である *mesti* は、通時的には優先モダリティとしての用法から発達したものと考えられる (cf. Traugott & Dasher 2002)。また、副詞の *sepatutnya* と形容詞の *patut* も同様にして、認識モダリティの用法を得たのであろう。

参考文献

- Asmah Haji Omar. 1970. *Bahasa Melayu Kini 2*. Kuala Lumpur: Federal Publications.
- Bhatt, Rajesh. 1999. *Covert Modality in Non-Finite Contexts*. ペンシルバニア大学博士論文.
- Chung, Siaw-Fong. 2011. Uses of *ter-* in Malay: A corpus-based study. *Journal of Pragmatics* 43: 799–813.
- Kratzer, Angelika. 1981. The notional category of modality. In H.-J. Eikmeyer and H. Rieser (eds.) *Words, Worlds, and Contexts*, 38–74. Berlin: Walter de Gruyter.
- Kratzer, Angelika. 1991. Modality. In A. von Stechow and D. Wunderlich (eds.) *Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung*, 639–650. Berlin: Walter de Gruyter.
- Nomoto, Hiroki, and Kartini Abd. Wahab. 2011. *Kena* passives in Indonesian: A Malaysian perspective. The 15th International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL)での発表論文.
- Nomoto, Hiroki, and Kartini Abd. Wahab. 査読中. *Kena* adversative passives in Malay, funny control and covert voice alternation.
- Portner, Paul. 2009. *Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- Siraj, Pasha. 2010. ‘Accidental’ *ter-* in Malay as an anti-bouletic modifier. The 17th Annual Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA)での発表論文.
- Soh, Hooi Ling. 1994. *Aspect and the Organization of Argument Structure: Evidence from Malay*. カルガリー大学修士論文.
- Soh, Hooi Ling. 2009. Speaker presupposition and Mandarin Chinese sentence-final *-le*: A unified analysis of the “change of state” and the “contrary to expectation” reading. *Natural Language and Linguistic Theory* 27: 623–657.
- Traugott, Elizabeth C., and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 鵜沢洋志. 2009. 「マレーシア語の派生接辞 *ter-*に関する一考察」『東京外大東南アジア学』14: 67–91.
- Winstedt, R. O. 1927. *Malay Grammar (Second Edition)*. Oxford: Clarendon Press.